

## ◆ 研究概要

1990年に北京留学に赴いて以来、中国映画研究にテーマを決め、1930年代上海映画黄金期に関する研究や、1980年代の「毛沢東文芸」から脱却する映画芸術運動に関する考察、毛沢東率いる中国社会主義国家建設期の「喜劇」映画研究などを行ってきました。本学着任以降は中国語学を講じる傍ら、中国映画を用いた語学教材の運用を試みたり、中国文化論講義に資するよう、中国伝統文化の再解釈や、中国人の慣習に関する考察などを展開しています。近年では、担当するゼミのテーマ「趣味を学問する」で学生諸君が持ち込んでくるサブカルチャー表象に基に、日本の「いま」を切り取ることができないか、と模索中です。そこに必要な時代的メルクマールは「1980年代」であり、これは日中文化位相をも包括するものでは、と想像をたくましくしているところです。

教養・基礎教育部門  
中国語・中国文化講義担当  
教授

よしなみ あきら

好並 晶

[a.yoshinami@socio.kindai.ac.jp](mailto:a.yoshinami@socio.kindai.ac.jp)



<http://researchmap.jp/AkiraYoshinami/>

## ■ 研究テーマなど

### 1. 歴代中国映画芸術に対する再考察

現代中国映画は、中華民国時代に勃興した進歩的映画文化運動に端を発して、今の時代までその足跡を残してきました。そのためか、中国における現代映画評論でも、往々にして社会主義史観が色濃く残り、映画作品が内包する潜在的価値をないがしろにしがちです。現在鑑賞可能な作品の映像を実際に「読解する」=仔細に分析することで、その作品が持つ正当な意義や価値を発見し、再度その作品を時間軸に載せなおす作業が重要だと考えています。意外な場面や台詞がその作品のありようを端的に語っていることを発見し、「読めた！！」と確信を得た時は、映画創作者たちが生きた時代、その時間と空間を共有するような、えも言えぬ昂奮を覚えるものです。

### 2. ことばは「現場」。中国語教育私見

中国が経済大国となった事実は、コロナ禍前に流行語となった「爆買い」や、コロナ後の「インバウンド」が私たちに直接実感させてくれるでしょう。街に出れば、至る所中国語がそれこそ「闊歩」しています。慎ましやかな日本人は、それを横目に少し遠ざかっていく様子。これでは、将来的に経済提携すべき相手を失くしてしまいます。ほんの少しの語学的知識と、ほんの少しの胆力で、彼らに接近できれば、きっと目の前の景色も変わってくるはず。コロナ期の閉鎖世界に浸った若き学生諸君に、その広汎な世界を知らせ、そこに「希望」があると教えた。そのためにはコンピューターのモニター内で展開する狭苦しい視界ではなく、教室というリアルな「現場」が不可欠、と語学教育に励んでいます。

### 3. 経験談が最も響く？ 中国文化論講義

中華料理が美味しい、パンダ可愛い……。いつの時代も中国のイメージは変わりません。そして負の側面は貧富差が大きい、大気汚染が酷い。これは実際の中国や中国の人たちと触れていない、TV メディアの情報のみで中国を捉えているからでしょう。担当の中国文化論では、私自身が中国留学中に体験したできごとを、できるだけリアルに語ります。ヴィヴィッドに、中国やその人々を感じてほしい、その思いは学生諸君に響いているようで、私に声を掛けてくる学生がいると、嬉しいものです。

### 4. 2次元と3次元との往還、そして1980年代

“2.5次元舞台”なるものをゼミ学生から教えて貰い、これは“ガン普拉”の再演だ、ととっさに感得しました。人間は映像・画像(二次元)を立体物(三次元)に置き換えたり、また三次元のものに二次元に還元したりする不思議な欲望を持ちます。そしてこれは、嘗て日本が経済的優位を誇った(と勘違いした)時代=1980年代に恐らくはその端を発している、と推測しています。現代日本サブカル全般が、80年代の延伸、或いは変奏であるのでは、と目論み、専門外ではありながら考察を徐々に進めています。

## ● 論文・評論など

### ○ 論文 (近作のみ)

1. 束の間の文芸復興—「喜劇映画問題討論」の“軌道” —  
『立命館文學』宇野木 洋 教授退職記念論集 通巻667号 p.261-279 2020年3月
2. 性はなにを物語るか—婁燁作品に見る性愛と愛情—  
『近畿大学日本文化研究所紀要』第3巻 p.35-52 2020年3月
3. 中国現代小説を翻訳する—標準化・演出・俯瞰—  
『近畿大学日本文化研究所紀要』第1巻 p.141-162 2018年3月
4. 若者から見る中国のいま—ネット・マニア・青春映画—  
『研究中国』第五号(通巻125号) p.9-19 2017年10月

### ○ 評論など (近作のみ)

1. コラム:映像は時代と人びとを投影する—中国映画鑑賞ガイド(1980〜)  
『中国語現代文学案内 中国、台湾、香港ほか』栗山千賀子・上原かおり編 ひつじ書房 p.176-179 2024年3月
2. エッセイ:長けりゃいいってもんじゃない—中国映画ロングテイク小評—  
『中国文芸研究会会報第500期記念号』p.51-57 2023年10月
3. 論評:阿部範之「馮小剛が映し出す主旋律の外の記憶」  
中国文芸研究会論文誌『野草』(106・107合併号)p.255-258 2021年9月

## ▲ 趣味

- ・ネオクラシック車に乗る: スバルBH5からBP5に乗り換え早四年。10km/1だろうと水平対向は最高!
- ・銀塩時代のレンズを使う: ペトリ・マミヤ・コーワプロミナー。それぞれの妙味を自在に扱う愉しさよ!
- ・新旧・国内外映画を観る: 現代作品の繊細さに、旧作の骨太の思想性。リマスタリングよ、有難う!

## ◆ ゼミ

2018年度生から“趣味を学問しよう”をテーマに展開しています。自分の興味に一言持つ学生たちが集い、愉快で刺激的な時間を創っています。断続的な運営ですが、「私は帰ってくる! 必ず!!!」